

皇典講究所第一年報
 本報ハ明治十五年九月一日ヨリ明治十六年八月三十一日ニ至ル當
 所第一學年中ノ報告ニシテ都テ當所ノ直接或ハ間接ニ關係セル諸
 般ノ事項ヲ記載ス但創業ノ顛末ヲ詳ニセンカ爲メ明治十五年二月
 ヨリ同八月マテノ記事及出納モ亦本報ニ編入ス

目次

記事大綱	設置趣旨 地所建築物略圖	一丁
本所設置	設置趣旨	二丁ヨリ
分所設置	教育趣旨 每週課業表	五丁
學事景况		六丁ヨリ
生徒募集		九丁
試業	定期試業表	十丁ヨリ
級長改撰	並表	十二丁

生徒勤怠 並表
 賞與犯則處分
 分所維持方法 分所圖表 裁財寄納表
 神官試験 尋禮授典統計表
 本分所職員 實成員 係員
 出納 並表
 書面員數 並表
 出京人員 並表

十二丁ヨリ
 十五丁
 十六丁ヨリ
 廿二丁ヨリ
 廿四丁
 廿五丁ヨリ
 廿七丁
 廿八丁ヨリ

第一年記事大綱

二月一日 總職員擔ノ 令旨ヲ奉ス	二月四日 宮内省下賜金 ノ達アリ	六月一日 制定係勤關係及 司計ヲ置ク
六月三日 本所設置	七月三日 書記ヲ置ク	七月廿五日 教場修繕着手
八月一日 文學部歴史科助教 及副舎長ヲ置ク	八月十四日 文學部文章科 助教ヲ置ク	八月十五日 幹事ヲ置ク
八月廿日 生徒寮修繕着手	八月廿三日 内務省所轄 トナル	八月廿三日 文學部修身科助教 及舎長ヲ置ク
八月廿三日 第一期生入學 試験始ル	八月廿五日 入學試験學ル	八月廿五日 文學部修身歴史 二科教授ヲ置ク
八月廿八日 教場落成	九月一日 第一學期始ル	九月一日 司計補ヲ置ク
九月五日 幹事長ヲ置ク	九月九日 三府四拾縣ニ 分所ヲ設置ス	九月十一日 幹事補ヲ置ク
九月十二日 委員委員補ヲ 置ク	九月廿五日 副總裁ヲ置ク	九月廿七日 事務係ヲ置ク
十月十六日 臨時試験始ル	十月十六日 作業者禮式科 教授ヲ置ク	十月廿三日 臨時試験學ル
十月卅一日 生徒寮落成	十一月四日 開費式及學神祭 施行	十一月廿四日 文學部文章科教授 ヲ置ク
十一月廿五日 作業者禮式科 助教ヲ置ク	十二月五日 臨時試験始ル	十二月十一日 臨時試験學ル

十二月十四日	文學部法令科 教授ヲ置ク	十二月十九日	皇族各官ヨリ 寄納金アリ	十二月廿五日	冬期休業始ル
一月二日	年賀式施行	一月四日	事務始	一月廿七日	入學試験畢ル
一月七日	總裁へ年賀	一月廿五日	第二期生入學 試験始ル	二月十二日	定期試験始ル
二月五日	臨時休業始ル	二月十日	臨時休業畢ル	二月廿日	第一學期畢ル
二月廿日	作業部音樂體操 二科教師ヲ置ク	二月廿日	定期試験畢ル	二月廿四日	板室縣二分所ヲ 設置ス
二月廿一日	第二學期始ル 學神祭施行	二月廿一日	總則師範學科ヲ 設ク	二月廿四日	設置ス
四月六日	臨時休業始ル	四月十二日	臨時休業畢ル	四月廿五日	講堂新築着手
五月廿二日	宮内省ヨリ講堂 建築費下賜アリ	五月廿三日	臨時休業始ル	五月廿九日	臨時休業畢ル
七月四日	富山佐賀兩縣二 分所ヲ設置ス	七月十日	臨時休業始ル	七月十六日	臨時休業畢ル
七月十七日	定期試験始ル	七月廿四日	定期試験畢ル	七月廿四日	第二學期畢ル
七月廿五日	夏期休業始ル	八月卅一日	夏期休業畢ル	每祭祝日曜日	休業

本所設置

本所ハ明治十五年六月ヲ以テ假ニ東京麹町區飯田町五丁目八番地ニ
設置シ同九月一日教師七名譽自費生徒三十七名ヲ以テ開學セシモ當
時教場學寮等未タ充分整理セサル所アリシヲ以テ僅ニ授業ニ着手セ
シノミ同十一月ニ至リ百事稍整頓セルヲ以テ同四日始メテ開學式ヲ
施行シ是ヨリ順次其歩ヲ進ムルコトヲ得タリ
本所ハ内務省ニ屬ス而シテ總裁ハ
皇上ノ聖旨ヲ以テ一品懺仁親王之ヲ負擔セラレ副總裁以下職員ハ皆
總裁ノ令旨ヲ奉シ各其務ニ服ス
本所設立ノ趣旨ハ開學式施行ノ日總裁ノ告諭並ニ本所創設ニ從事セ
ル穴野半外五名ノ告文ニ明了ナルヲ以テ今之ヲ左ニ記載ス

告諭

皇典講究所假建設成ル茲ニ良辰ヲ撰ヒ本日開學ノ式ヲ行フ懺仁總

裁ノ任ヲ負ヒ親ク式場ニ臨ミ職員生徒ニ告ク
凡學問ノ道ハ本ヲ立ツルヨリ大ナルハ莫シ故ニ國體ヲ講明シ以テ
立國ノ基礎ヲ鞏クシ徳性ヲ涵養シ以テ人生ノ本分ヲ盡スハ百世易
フヘカラサル典則ナリ而シテ世或ハ此ニ暗シ是本體ノ設立ヲ要ス
ル所以ナリ

今ヨリ後職員生徒此ノ意ヲ體シ夙夜懈ルコト無ク本體ノ隆昌ヲ永
速二期セヨ

明治十五年十一月四日

皇典講究所總裁一品儀仁親王

告文

文明ノ化ハ術藝ニ立テ道德ニ成ル術藝ハ新ナルヲ尚ヒ道德ハ變テ
サルヲ要ス新ナル者ハ進ミ易ク變テサル者ハ競ヒ難シ是ヲ以テ術
藝日ニ講明セサルナキモ道德年ニ湮晦ヲ加フルハ宇内ノ通弊ナリ

中ニ就テ我皇國ノ國體ハ道德ヲ離レテハ一日モ立フヘカラサルヲ
以テ苟モ我國人タル者尤此ニ猛省セサルヘカラス
今ヤ我カ國精文運ニ向ヒ到ル所公私ノ學大小ノ設アラサルハ莫ク
學術ノ一端ニ至リテハ文明ノ具亦略備ハレルカ如シ然レモ其舉概
ネ皆智巧ヲ尚ヒ技術ヲ競ハシムルニ在ルヲ以テ道德術藝常ニ其權
衡ヲ保タス所謂皮膚厚ケレハ筋骨脆キノ歎ヲ免レス况ヤ維新以來
上下汲々經營スル所ノ者多クハ文明ノ皮膚ヲ裝飾スルニ在リテ未
タ專ラカヲ其筋骨ノ養ニ致セル者アルヲ聞カサルヲヤ
抑モ國ノ隆替ト道ノ顯晦トハ唯賢哲其人ノ興廢ニ存ス是レ人能ク
國ヲ興シ人能ク道ヲ弘ムルモ國ノ人ヲ興シ道ノ人ヲ弘ムルニ非サ
ルヲ以テナリ故ニ苟モ國ノ盛昌ヲ期シ道ノ興隆ヲ望マハ先フ人材
ヲ養成スルニ若クハナシ嗚呼今日ニ於テ育材ノ業其亦己ムヘカラ
サルカ

是ヲ以テ本年新ニ皇典講究所設立ノ舉アリ全國精英ノ少年ヲ募集
シ專ラ國典ヲ講明シ禮樂ヲ備習セシメ其心志ヲ鞏固ニシ其徳性ヲ
涵養セシメ兼ヌルニ漢洋ノ學武技體操ノ術ヲ以テシ其才識ヲ博メ
其元氣ヲ養ヒ以テ國家有用ノ人物ヲ陶冶シ國體ヲ萬世無疆ニ保維
シ皇道ヲ四裔ノ外ニ發揚スル大基礎ヲ立テントス
聖上夙ニ此舉ヲ嘉シタマヒ既ニ本年二月賜フニ若干金ヲ以テシ猶
將來年々賜フ所アラントス加之山田内務卿櫻井社寺局長大ニカヲ
此ニ盡サレ又有柘川總裁宮久我副總裁專獎勵統率シテ以テ此舉ノ
全成ヲ規畫セラル其等苟モ事ニ此ニ從フ者豈益奮進勵精シ以テ其
規模ヲ大ニシ以テ其成業ヲ期セサル可ケンヤ然リト雖モ事功窮リ
ナクシテ責任モ亦重シ是ヲ以テ今博ク天下ノ同志ニ諭ケ其補翼贊
成ヲ得テ以テ此舉ノ隆昌ヲ期セントス天下同感ノ諸君苟モ
廷儀舉ヲ嘉シタマフ 恩旨ヲ奉シ内務省獎勵ノ盛意ニ戻ラス理

論ニ走ラス權勢ヲ貪ラス各自應分ノカヲ振ヒ先ツ此舉ヲ贊助シ均
シク本所ニカヲ併セ本所ノ隆昌ヲ圖ラハ其効延イテ全國ニ及ヒ皇
道日ニ其興隆ヲ増シ國體年ニ其尊嚴ヲ加ヘ終ニ道德術藝並行ハレ
テ文明ノ淳化天下ニ浹洽シ大ニ國美ヲ海外ニ發揚スルニ至ラン願
クハ天下同感ノ諸君此議ヲ諒シ財ヲ拋テカヲ愛マス同ク此舉ヲ助
ケテ其勤勞ヲ勵シ其成功ヲ責メ以テ堪輿無比ノ國體ヲ不朽ニ擁護
シ明治昭代ノ隆恩ニ報答セラレントヲ其等冀望ノ至ニ任ヘサルナ
リ

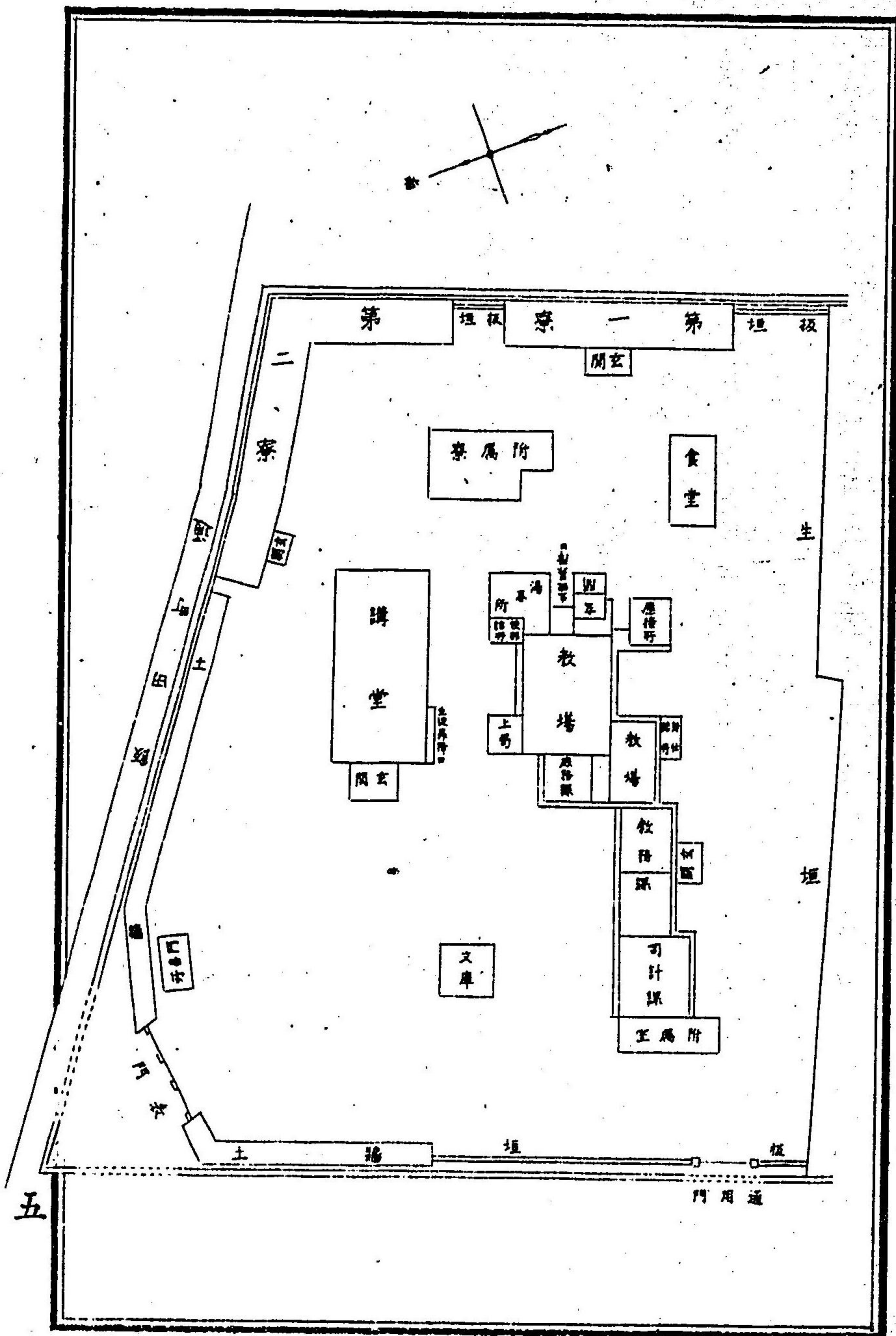
明治十五年九月

穴野 半
井上 頼國
久保 季茲
松野 勇雄
古川 豊彭

石垣甚内

明治十五年二月四日内務卿ヨリ今般皇典講究所設立ノ趣被
 聞食當明治十五年ヨリ向十年間年々金貳千四百圓宛下賜ノ旨宮内卿
 ヨリ通知アリタル趣ヲ達セラレタリ
 明治十五年十二月十九日有栖川宮伏見宮小松宮山階宮北白川宮梨本
 宮華頂宮閑院宮ヨリ本所設立ノ舉ヲ嘉尚セラレ金六百圓ヲ下賜セラ
 レタリ

明治十六年四月二十五日教場校隘ニ付キ列ニ講堂新築ニ着手セリ未
 ル十一月落成ノ見込ナリ
 同五月二十二日宮内省ヨリ講堂建築費用ノ内へ金三百圓下賜セラレ
 タリ
 本所ノ地所建物略圖並ニ其坪數等左ノ如シ



地面	千六百六十六坪一合九勺	建物 ^{十三}	四百二十坪一合六勺
講堂	九十五坪六合六勺	教場	四十九坪五合
事務所	六十二坪	應接所	七坪五合
文庫	七坪	第壹寮	七十七坪二合五勺
第二寮	六十八坪七合五勺	附屬寮	二十四坪五合
食堂	二十四坪五合	門番所	三坪五合
表門	二十五尺	通用門	十二尺
土牆	三百十八尺	生垣	二百七十尺
板垣	百九十八尺		

分所設置

明治十五年九月九日東京府外二府四十縣(沖繩縣ヲ除ク)ニ假分所ヲ設置ス根室縣ハ當時分所ヲ設置スヘキ場所未定ナリシヲ以テ明治十六年二月二十四日ニ至リ始メテ假設スルヲ得タリ佐賀富山宮崎ノ三縣

ハ明治十六年五月分設ノ新縣ナルヲ以テ富山佐賀ハ七月四日宮崎ハ第二年ニ入り明治十六年九月十九日ヲ以テ假設セリ茨城縣ハ明治十六年三月十三日栃木縣ハ同五月二十七日開所式ヲ施行ス右二縣ハ分所維持方法確定ノ上順次本年中開所式ヲ施行スルニ至レリ此他ハ大抵第二年ニ入り開所式施行ノ見込ナリ其中群馬縣ハ十月二十一日函館縣ハ十一月一日石川縣富山縣ハ何レモ十一月十一日開所式施行ノ答ニ豫定セリ

學事景况

本年中學事ノ景况ハ創業初年ニ屬シ教員寡少ナルヲ以テ課業ノ時間教科ノ組織等未タ充分ノ整頓ヲ得サレハ詳ニ之ヲ報告スルノ能ハスト雖左ニ其大概ヲ記ス

文學部

本部ハ專典籍ニ就イテ學術ヲ研究セシム其學科ヲ分テ備身歴史法

令文章ノ四科トス

脩身科ハ專本邦ノ古典ヲ教授シ道德ノ本原ヲ知ラシメ且脩身ノ要
ハ徒ニ空言ニ馳セスシテ行事ノ深切明著ナルニ就イテ自ラ趨避用
舎スル所ヲ詳ニスルニ在ルヲ以テ古聖先哲脩己治人ノ實踐上ニ於
テ道義ノ存スル所ヲ講明セシム正科ハ教授久保季茲助教木野戸藤
隆副科ハ教授秋月胤永ノ擔任スル所ナリ

歴史科ハ本邦開國以來神聖相繼イテ天下ヲ經綸シ億兆ノ臣民万世
一帝ニ服事スル所ノ事實及世ノ治亂時ノ汚隆人情風俗ノ變遷等ヲ
熟知シ人生處世上ニ於テ順逆嚮背ノ方ヲ知ラシム正科ハ教授井上
頼國助教矢野萬太郎副科ハ教授秋月胤永同橋本寧ノ擔任スル所ナ
リ

法令科ハ歷朝聖皇鴻基ヲ授受シ天下ヲ經綸シタマヘル洪範タル制
度法令ヲ講明シ立國ノ體段ヲ知ラシメ且時勢人情ノ變遷ニヨリ自

ラ沿革アリテ寬嚴詳略ノ趣ヲ異ニシ活轉流用ノ方ヲ知ラサルヘカ
ラスト雖モ立法ノ精神經世ノ綱紀ニ至リテハ萬世不可易ノ要領ニ
通曉セシム正科ハ教授小中村清矩ノ擔任スル所タリ副科ハ今之ヲ
欠ク

文章科ハ言語文章ノ用法ヲ教授シ万世載道ノ器之ヲ捨テ、他ナク
人生日用ノ具之ヨリ大ナルハ莫キ所以ト特ニ本邦言語ノ妙ハ万邦
ニ卓絶シタル所以トヲ講明シ遊技ニ流レス實用ニ適ハンヲ勉メ
シム正科ハ教授權田直助助教林麿臣副科ハ教授橋本寧ノ擔任スル
所ナリ但權田直助ハ本年中未タ授業セス

作業部

本部ハ專身體ニ就イテ進退動止ノ節度ヲ脩習セシム其學科ヲ分テ
禮式音樂體操ノ三科トス
禮式科ハ祭祀及貴賤上下相交際スル間ニ於テ尤モ必要ナル禮節ヲ

習ハシ道徳ノ基礎ヲ固メ報反ノ禮儀人文ノ節度ヲ知ラシメ兼テ骨
節機關ヲ運轉シ身體發育ノ用ヲ充サシム本科ハ教授山田有年同松
岡明義同平山省齋助教徳岡久遠ノ擔任スル所ナリ但平山省齋ハ本
年中未タ授業セス

音樂科ハ唱歌奏樂ヲ講習シ聲音ヲ正クシ言語ヲ整ヘ兼テ胸膈ヲ開
キ精神ヲ養ヒ氣血ノ循環ヲ善クシ倦厭ノ情ヲ去リ忍耐ノカヲ補フ
體育ノ用ニ供セシム本科ハ教師東儀俊慰同山井景順同豊喜秋ノ擔
任スル所ナリ

體操科ハ本邦ハ尚武ヲ以テ國ヲ立ツル所以ヲ講明シ義氣ヲ養ヒ筋
骨ヲ固メカメテ身體ヲ強壯ニシ文弱ニ流レス專事ヲ爲スニ勝ヘシ
メンカ爲メ擊劍柔馬等ノ術ヲ習ハシ且體育ニ要用ナル諸術ヲ演習
シ體格ヲ矯正シ容止ヲ整頓シ肺量氣力ヲ培養セシム本科ハ教師大
河内信古同青戸波江ノ擔任スル所ナリ但大河内信古ハ本年中未タ

授業セス

以上教授スル所ノ趣旨ヲ約言スレハ文學部ハ智育ニシテ作業部ハ體
育ナリ凡教育ノ目的ハ智體兼養ヲ以テ完全ナルモノトス智餘アル
モ體之ニ稱ハサレハ其用ヲ成ス能ハス體全キモ智足ラサレハ又其用
ナシ故ニ智體兼養ト始メテ有用ノ人物ヲ養成スルヲ得ヘシ本所ノ教
育全ク斯ニアリ

文學部中法令科ハ本科ニノミ設クル所ナレ其修業ノ容易ナラサル
ヲ以テ豫科ニ於テ其緒ヲ開キ本年第二期ヨリ一週一時間ノ業ヲ備メ
シム但豫科ノ專業ニ非サルヲ以テ各試業ヲ行ハス
作業部禮式科中祭典ハ第一期ヨリ諸禮ハ第二期ヨリ之ヲ始ム故ニ諸
禮ハ第三級第四級生共ニ同一ノ業ヲ修メシム
同音樂科ハ第二期ヨリ之ヲ始ム故ニ第三級第四級生共ニ同等ノ業ヲ
修メシム

同體操科中諸術ハ教師未定教場器械等亦未タ完全ナラサル所アリテ
 本年中着手スル一能ハサリキ但擊劍ハ第二期ヨリ之ヲ始メタレモ未
 タ試業ヲ行フニ至ラス
 第一期中ハ授業法未タ確定セサリシヲ以テ課業時間甚少ク且各科不
 平均ナリシモ第二期ニ入り順次改良ヲ加ヘ稍整頓スルヲ得タリ左ニ
 其概表ヲ記ス

第一年中各科每週課業時間表

科	第一期		第二期	
	前 半 期	後 半 期	前 半 期	後 半 期
禮 式	二 時	二 時	四 時	四 時
文 章	十 時	十 時	八 時	九 時
法 令		一 時	一 時	一 時
歷 史	七 時	七 時	六 時	六 時 半
情 身	六 時	六 時	十 時	十 時
教 科	四 級	四 級	三 級	三 級
一 日 平 均	四 時 三 十 分	四 時 五 十 分	六 時 二 十 分	六 時 三 十 分

第二期ヨリ正則通學生及變則通學生ヲ置ク正則通學生ハ本所ノ正則
 教程ヲ以テ教授シ五年ニシテ卒業スルモノニシテ正則費自費生ニ異
 ナル一ナシ唯便宜ノ爲ニ之ヲ置ク變則通學生ハ卒業ノ後專分所ノ師
 範ヲラシメンカ爲ニ置ク所ニシテ分所ノ教程ヲ以テ教授シ之ニ通曉
 セシム卒業ノ期ハ三年トス

生徒募集

生徒ハ費費生百名自費生百名通學生百名都合三百名ヲ以テ定員トシ
 本年ヨリ五年間ニ之ヲ募集シ満員ニ至ラシム故ニ毎學期(二月、九月)
 前數十名ヲ募リ入學試験ヲ行ヒ合格ノ者ヲ擧ケテ費費生自費生又ハ

通學生トシ入學セシムルヲ例トス本年第一期生ハ明治十五年八月費
費生三十名自費生二十名ヲ募ル此募ニ應スル者三十六名ニシテ同月
二十三日ヨリ三日間入學試験ヲ施行セシニ合格ノ者費費生十九名自
費生七名アリ九月一日（第一期初日）入學許可狀ヲ附與シ即日入寮
セシム第二期生ハ明治十六年一月費費生十六名自費生三十名（内通
學生二十名）變則生二十名ヲ募ル此募ニ應スル者三十二名ニシテ同
月廿五日ヨリ三日間入學試験ヲ施行セシニ合格ノ者費費生十五名自
費生四名通學生三名變則生三名アリ二月二十一日（第二期初日）入
學許可狀ヲ附與シ即日入學セシム以上入學ヲ許可シタル生徒ノ數通
計五十一名ナリトス而シテ病氣又ハ事故アリテ退費シタル者犯則ニ
ヨリテ退費ヲ命シタル者自費生ノ學費ニ關之シテ退費シタル者等第
一期第二期生通計十五名ナリ故ニ本年末ニ至リ生徒現在員ハ三十六
名トス右ノ外第二年第一期入學スヘキ生徒ハ明治十六年八月ヲ以テ

費費生自費生通學生變則生各十名ヲ募ル此募ニ應スル者十九名ニシ
テ同十五日ヨリ三日間入學試験ヲ施行シ合格ノ者費費生十名自費生
四名通學生二名アリ通計十六名トス九月一日（第二年第一期初日）
入學許可狀ヲ附與シ即日入學セシム此ノ生徒ニ係ル學事諸項ハ總テ
第二年ニ係ルヲ以テ本報ニ之ヲ略シ明治十七年九月第二年報ヲ以テ
報告スヘシ

試業

試業ハ臨時定期ノ二種ニシテ定期ハ每學期ノ末臨時ハ學期中凡每七
週間ニ之ヲ施行ス故ニ本年中試業ノ數ハ定期ハ二度臨時ハ六度トス
臨時試業ノ評點ハ何レモ定期試業ノ評點ニ合算平均シテ定期總評點
ヲ定ムルヲ以テ各自ニ報告スルヲ要セス故ニ今兩定期試業表ノミヲ
左ニ記載ス表中生徒氏名記列ノ順ハ兩定期總評點並ニ其優劣ニヨリ
テ之ヲ定ム

第一定期試験
第二定期試験
業表

第一定期試験 業總評點	同優劣	同處分	第二定期試験 業總評點	同優劣	同處分	氏名
九一	乙	昇級	九五	乙	昇級	大原政臣
九〇	乙	昇級	九四	乙	昇級	永井兼
八九	丙	昇級	九二	乙	昇級	山田岩次郎
八七	丙	昇級	九一	乙	昇級	清水佐六郎
八六	丙	昇級	九〇	乙	昇級	吉田龜壽
八五	丙	昇級	八九	乙	昇級	平賀次郎
八四	丙	昇級	八七	乙	昇級	三崎民樹
八三	丙	昇級	八六	乙	昇級	瀬川小石磨
八二	丙	昇級	八五	乙	昇級	島山三郎
八一	丙	昇級	八四	乙	昇級	岩松祐三郎
八〇	丙	昇級	八三	乙	昇級	田内達有
七九	丙	昇級	八二	乙	昇級	小林芳樹
七八	丙	昇級	八一	乙	昇級	小野登丸
七六	丙	昇級	八〇	乙	昇級	加野登丸
七五	丙	昇級	七九	乙	昇級	藤野雷之助
七四	丙	昇級	七八	乙	昇級	櫻木松壽
七三	丙	昇級	七八	乙	昇級	杉谷隆太郎
七二	丙	昇級	七六	乙	昇級	高山
七一	丙	昇級	七五	乙	昇級	飯野前之助
七〇	丙	昇級	七四	乙	昇級	矢野
六九	丙	昇級	七三	乙	昇級	鈴木三郎
六八	丙	昇級	七二	乙	昇級	坂本三郎
六七	丙	昇級	七一	乙	昇級	坂本三郎
六六	丙	昇級	七〇	乙	昇級	坂本三郎
六五	丙	昇級	六九	乙	昇級	坂本三郎
六四	丙	昇級	六八	乙	昇級	坂本三郎
六三	丙	昇級	六七	乙	昇級	坂本三郎
六二	丙	昇級	六六	乙	昇級	坂本三郎
六一	丙	昇級	六五	乙	昇級	坂本三郎
六〇	丙	昇級	六四	乙	昇級	坂本三郎
五九	丙	昇級	六三	乙	昇級	坂本三郎
	丙	昇級	六二	乙	昇級	坂本三郎
	丙	昇級	六一	乙	昇級	坂本三郎
	丙	昇級	六〇	乙	昇級	坂本三郎
	丙	昇級	五九	乙	昇級	坂本三郎

淺野富之助櫻木松壽ハ父母ノ病氣看護ノ爲ニ特別歸省ヲ許シ及シ
ク闕課セルヲ以テ第二定期試験ヲ施行セス上森光太郎モ全上ニテ
歸省シ闕課多カリシモ本人ノ願ト教師ノ見込トニヨリ延期試験ヲ
施行シタルニ遂ニ合格ニ至ラス仍テ右三名ハ試験定則ニヨリ何レ
モ原級ニ留メ復前期ノ諸科ヲ講習セシム

試験ノ法ハ文學部各科ハ都テ數人一席ニ時間ヲ限リ問題ヲ筆記セシ

八八	丙	昇級	森田覺太郎
八八	丙	昇級	小沼總藏
八六	丙	昇級	金嶺官守
八六	丙	昇級	宮垣壽丸
八五	丙	昇級	鹿島則泰
八四	丙	昇級	石井豐丸
八一	丙	昇級	山本由亮
八〇	丙	昇級	瀬川雅亮
八〇	丙	昇級	中津東策
七七	丙	昇級	植木三郎
七三	丙	昇級	萩原彦太郎
七三	丙	昇級	井上泰雄
五九	丙	昇級	上森光太郎
	丙	昇級	留落原級

メ口頭講演ハ一切ナサシメス其故ハ尋常ノ如ク每一人ニ問題ヲ口頭ニ講演セシムル時ハ受験者ハ席ヲ憚リテ辨説盡サ、ルモノアリ或ハ其實充分了得シタルトモ不辨ノ爲ニ前後錯雜シテ緩急輕重ノ間ニ本意ヲ説キ損スルトアリ又検査人ハ辨説ノ模様ニヨリ聞僻ムルト或ハ偶聞漏スト等アリ且唯口頭ノ言説ナルヲ以テ纔ニ席上ノ記憶ニ止リ後ニ彼此相比較シテ優劣ヲ計リ評點ヲ定ムルニ至リテハ毎ニ其判決ニ苦ム所ナレトモ之ヲ筆記セシムル時ハ都テ右等ノ憂ナキノミナラス検査人ノ中事故アリテ試業ニ闕席スルトアルモ筆記シタル解説ハ久ク消滅セサルヲ以テ後日ニ至リ尚其書取ヲ驗閱シテ其力ノ優劣得失ヲ見得ルト甚容易ナレハナリ故ニ筆記ヲ以テ尤モ試業ノ良法トス但作業部各科ニ至リテハ進退動止又ハ聲音緩急ノ間ニ於テ其巧拙熟否ヲ試ムヘキモノナレハ大ニ文學部各科ト其趣ヲ異ニシ均ク此法ヲ用ウルト能ハス又作業ハ口頭演述ノ文學部ニ於ケルカ如キ憂ハ甚少

ク必シモ此法ニ依ルヲ要セサレハ筆記ヲ用井ス孰レモ實地動作發音等ノ上ニ就テ其得力ノ優劣ヲ試ム

級長改撰

級長ハ各級之ヲ置キ毎臨時試業（凡七週間）ニ最高點ヲ得タル者ニ之ヲ命ス（但第三臨時試業ハ定期試業ニ連接セルヲ以テ其點數ニヨラス定期試業ノ點數ニヨル）故ニ大抵生徒ノ學力相頡頏スル時ハ毎試業ニ改選スト雖モ若シ學力稍優等ニシテ毎度高點ヲ得ル者ニハ之ヲ勤績セシム本年中級長ヲ改選スルト左ノ如シ

學期		第一期		第二期		
入學期	改撰期	第一臨時試業	第二臨時試業	定期試業	第一臨時試業	
第一期入學生	級四	折田年基	級四	折田年基	級三	山田君次郎
第二期入學生					級四	矢田求
					級三	大原政臣
					級三	永井康
					級四	高山昇
					級三	永井康
					級三	杉谷隆太郎

折田年基ハ明治十五年十月二十四日ヨリ勤続キ明治十六年二月二十日ニ至ル山田岩次郎ハ明治十六年二月二十一日ヨリ同四月十二日ニ至ル大原政臣ハ明治十六年四月十三日ヨリ同五月二十九日ニ至ル永井豪ハ明治十六年五月三十日ヨリ勤続キ第二年ニ入ル矢田求ハ明治十六年四月十三日ヨリ同五月廿九日ニ至ル高山昇ハ明治十六年五月三十日ヨリ同七月二十四日ニ至ル杉谷隆太郎ハ明治十六年七月二十五日ヨリ第二年ニ入ル

生徒勤怠

第一期中生徒ノ勤怠ハ左表ノ如シ本期ハ未タ授業法ノ整頓セサルト教師ノ人少ナルトニヨリ各科出席ノ度数百三十二度ヲ全数トス表中白色ハ出席ノ数ニシテ黒色ハ闕席ノ数ナリ何レモ二厘ヲ以テ一席ノ度トス

第一年二期生徒勤怠表

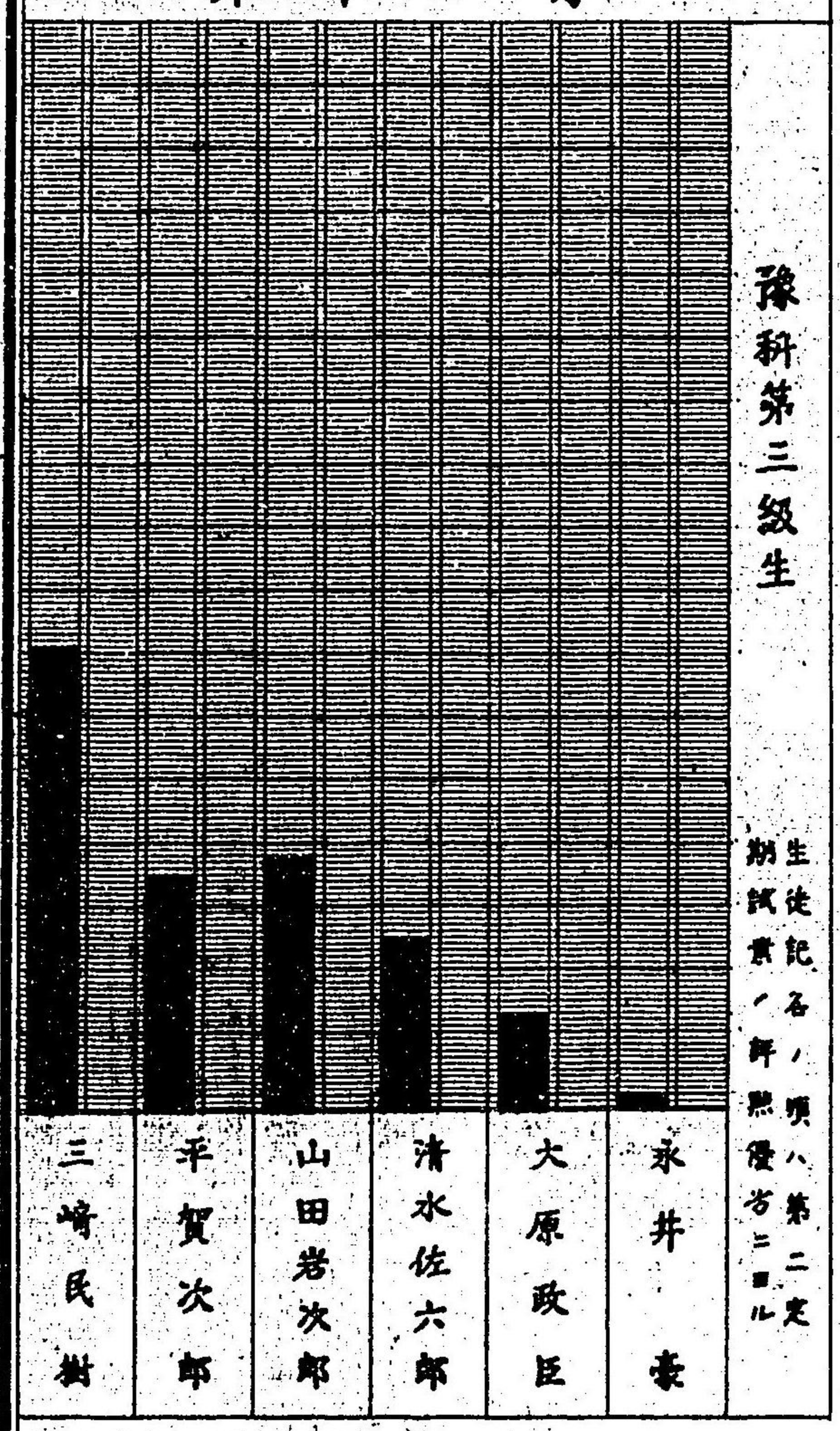
深科第四級生															
山田岩次郎	淡野富之助	大原政臣	永井豪	吉田龜壽	島山健	清水佐六郎	平賀次郎	田内逸有	岩松祐三郎	瀬川小石唐	小林芳樹	三崎民樹	駒川東馬	櫻木松壽	卯野澄丸
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

深科第四級生

生徒記名ノ順ハ第一巻前頁ノ詳見セヨ

第二期中生徒ノ勤怠ハ左表ノ如シ各科出席度數第三級生ハ三百四十五度第四級生ハ三百三十三度ヲ全數トス表中白黒勤怠ノ例ハ前表ニ同シ

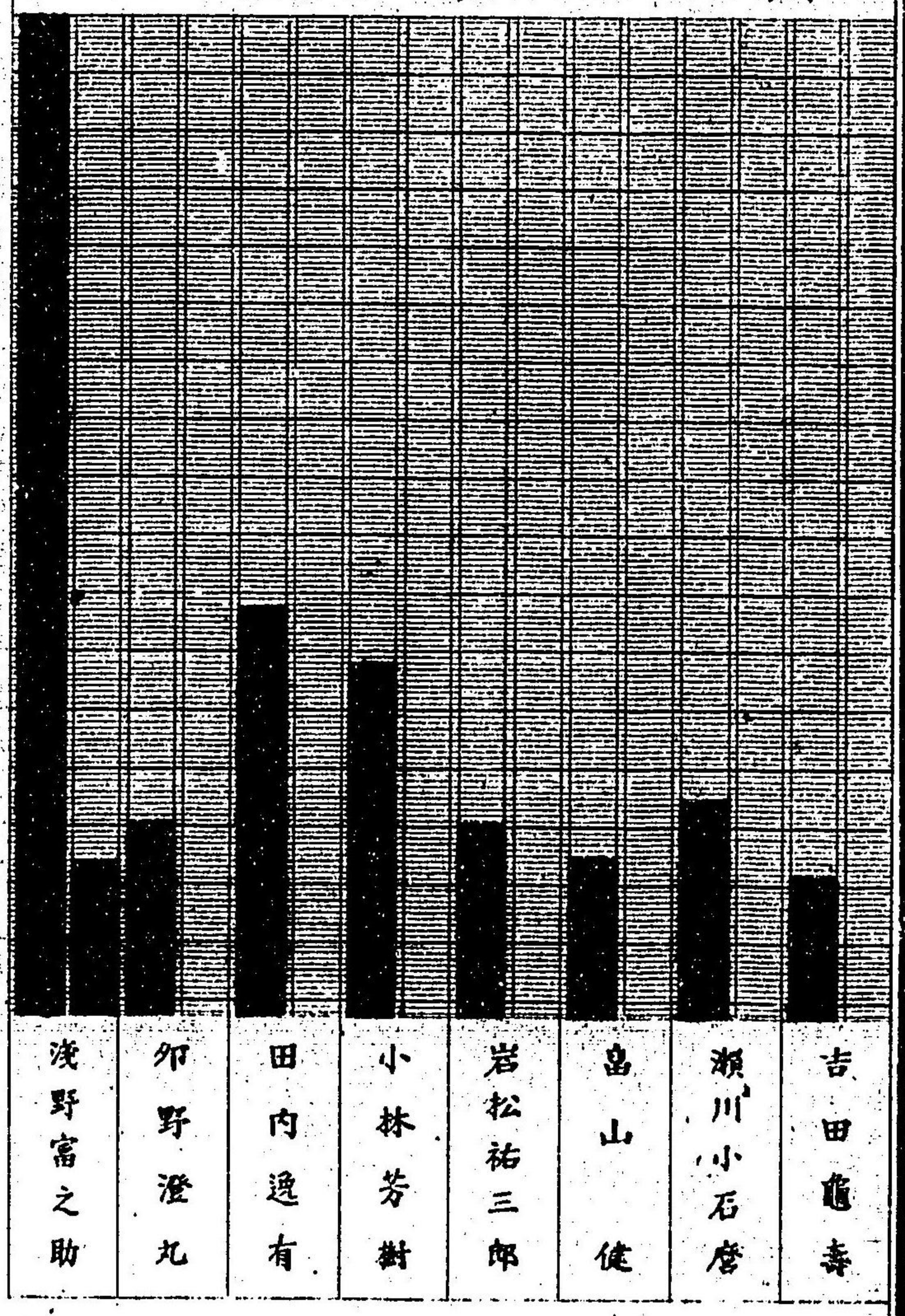
第一年一第



豫科第三級生

生徒記名ノ順ハ第二定期試費ノ評點優劣ニヨル

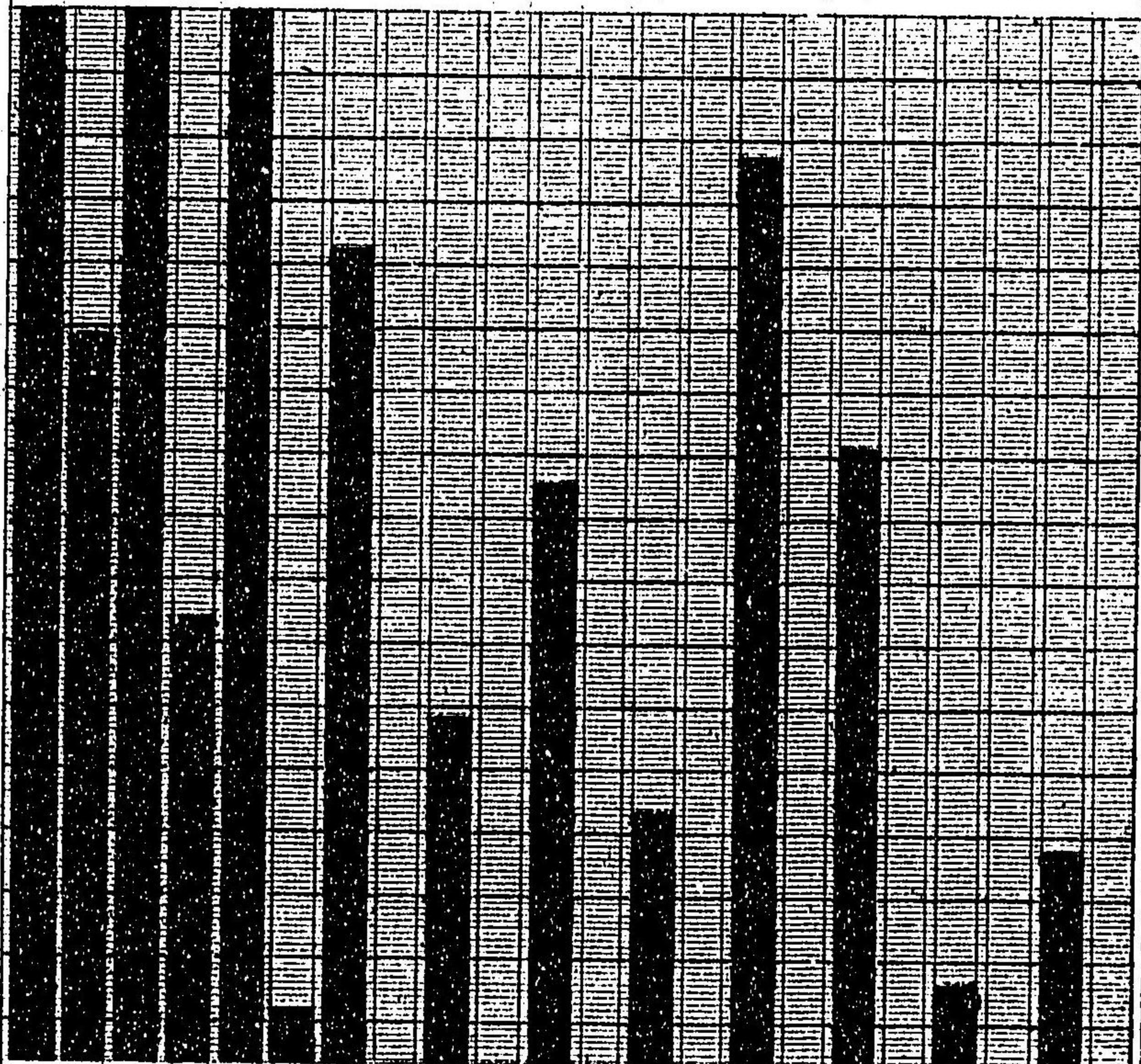
期生徒勤怠表



豫科第四級生

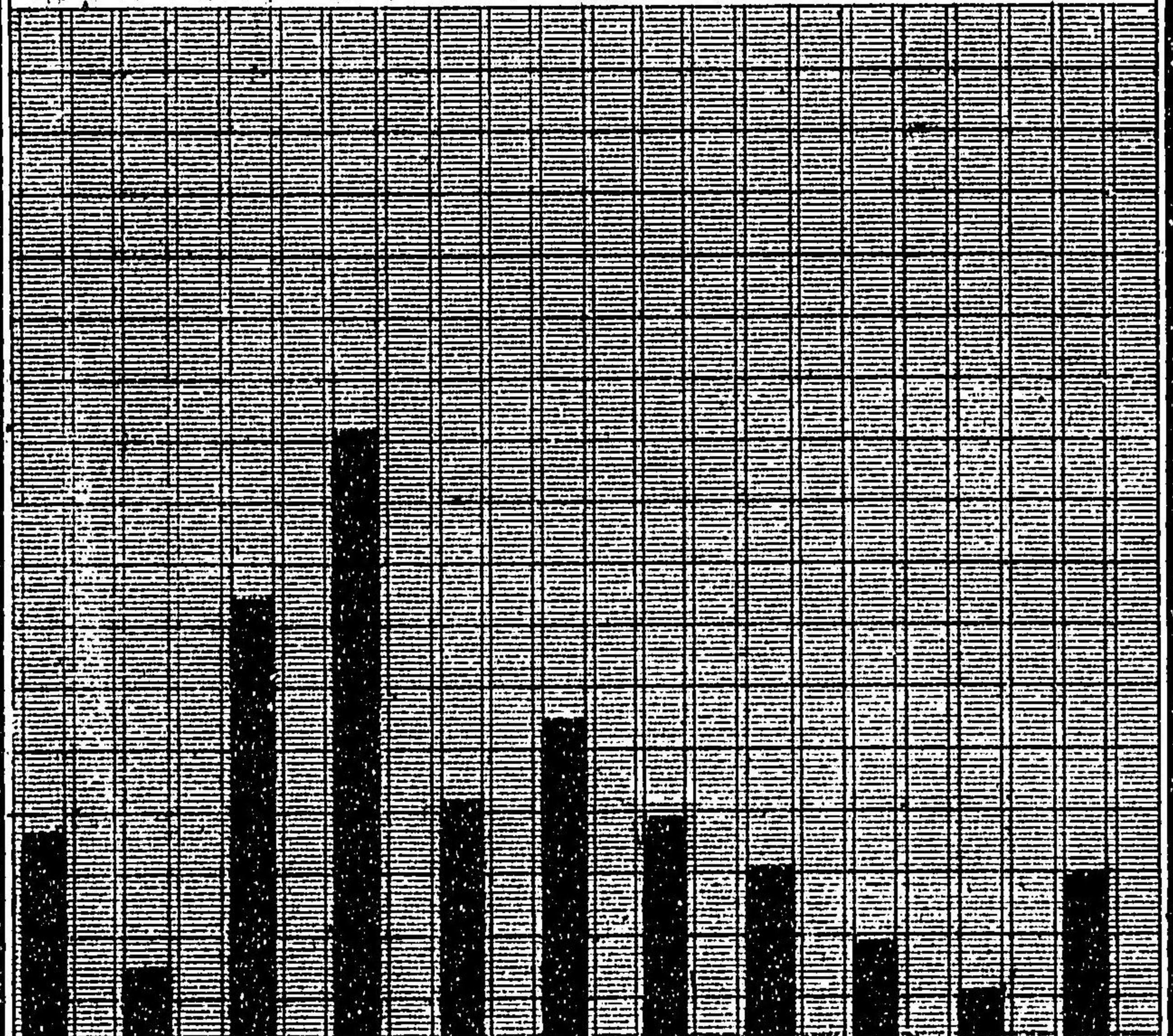
生徒記名ノ順全上

生徒勤怠表



櫻木松壽	白土正種	上森光太郎	井上恭雄	萩原彦太郎	植木三事	中津東策	瀬川雅亮	山本由郎	石井豊光	鹿嶋則恭
------	------	-------	------	-------	------	------	------	------	------	------

第一年第二期



宮垣暢丸	金鑽宮守	小沼總藏	森田覺太郎	永室鏡之輔	阪喜三郎	鈴木鏡次郎	矢田求	飯野菊之助	高山昇	杉谷隆太郎
------	------	------	-------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------

賞與並犯則處分

本年中精勤ニ付賞與品ヲ附與シタル者左ノ如シ

賞與品	科級	氏名
古事記 一部	豫科第三級	永井 兼
延喜祝詞式 一部	豫科第三級	大原 政臣
古語拾遺 一部	豫科第四級	高山 昇
古語拾遺 一部	豫科第四級	金嶺 吉守
古語拾遺 一部	豫科第四級	石井 重九
古語拾遺 一部	豫科第四級	飯野 前之助

右賞與ハ明治十六年九月一日施行セシ所ナレトモ本年中ノ精勤ヲ賞シタル者ニシテ其事本年ニ係レルヲ以テ今本報ニ編入ス
 慶則並ニ舍則ヲ犯シタルニ付處分シタル者左ノ如シ

分所維持方法

分所維持方法ハ各府縣地形人情ノ異ナルヨリ各自一種ノ慣例アリ隨テ協賛委員等施設ノ見込ヲ立ツルコト同シカラサルヲ以テ各地畫一ノ方法ニ依ルコト能ハスト雖モ其募集スル所ノ金高及本所異費ノ出金等ヲ比較スレハ大抵伯仲ノ間ニ居リ大ナル異同ナシ今維持方法既定ノ府縣ヲ左ニ陳列シ下ニ各其方法ノ大概ヲ記載ス

處分	年月日	科級	氏名
退費	十六年三月廿一日	豫科第四級	大原 輝三郎
退費	同月同日	豫科第四級	北御門 松二郎
禁足十週間	同月二日	豫科第四級	吉田 龜壽
禁足三週間	一月廿二日	豫科第四級	瀬川 小石磨

東京府 明治十五年十一月四日申出 即日認可

本府八十年ヲ以テ法ヲ立ツ府社以下百六十三社ヨリ八千七百九十五圓同神官並教導職三十二名ヨリ二千百八十三圓合セテ一万九百七十八圓ヲ募リ悉皆之ヲ本所へ寄納シ本所ヨリ其十分ノ四ヲ下附シ分所費トス

茨城縣

明治十五年十一月四日申出
即日認可

本縣八十年ヲ以テ法ヲ立ツ縣社以下二百四十九社ヨリ五千圓ヲ募リ悉皆之ヲ本所へ寄納シ本所ヨリ二千圓ヲ下附シ分所費トス

神奈川縣

明治十五年十一月四日申出
即日認可

本縣八十年ヲ以テ法ヲ立ツ縣社以下千二百二十五社ヨリ其社入金ノ高二應シ五千五百圓ヲ募リ悉皆之ヲ本所へ寄納シ本所ヨリ二千二百圓ヲ下附シ分所費トス

千葉縣

明治十六年一月二十五日申出
二月十二日認可

本縣八十年ヲ以テ法ヲ立ツ官幣社三社國幣社一社ヨリ四百圓縣社

以下神官二百名ヨリ五千圓合セテ五千四百圓ヲ募リ悉皆之ヲ本所へ寄納シ本所ヨリ二千百六十圓ヲ下附シ分所費トス

群馬縣

明治十六年二月十一日申出
同 二十二日認可

本縣八三年ヲ以テ法ヲ立ツルモノニシテ明治十六年ヨリ向三年間ニ縣社以下各社氏子百戸ニ付金十五圓ツ、ヲ賦課ス氏子總戸數十二万六千百八十五戸ニシテ一戸十五錢ツ、ヲ収メシムルヲ以テ此金合計一万八千九百二十七圓七十五錢トス内五千圓ヲ十年賦ヲ以テ本所ニ寄納シ殘額一万三千九百二十七圓七十五錢ニ本所ヨリ下附スル所ノ二千圓ヲ合セテ一万五千九百二十七圓七十五錢ヲ分所資本トス猶外ニ縣社以下有名ノ各社ヲ社入金ノ多寡ニヨリ六等ニ分チ優等ハ四社各七十五圓甲等ハ三社各五十圓乙等ハ七社各三十圓丙等ハ六社各二十圓丁等ハ二十七社各十圓戊等ハ社數未定三圓以上七圓以下トシ三年賦ニ出金セシメ又祠官掌百五十名ヨリ同年

賦ニ金壹圓以上各自應分ノ義金ヲ出サシム右兩種ノ金ヲ合セテ補助金トシ經費ニ充ツ尚右ノ外有志者ヨリ募財ノ見込ナレモ其方法未タ確定セス

函館縣

明治十六年三月廿二日申出
四月十八日認可

本縣ハ一年ヲ以テ法ヲ立テ漸次改良スルモノトス縣社以下各神社現任神官三十一名ニシテ一名ニ付一年三圓六十錢ヲ、ヲ課出シ合計百十一圓六十錢ヲ本所へ寄納シ本所ヨリ該金額ヲ悉ク下附シ當分々所費トス

徳島縣

明治十六年四月十二日申出
五月三日認可

本縣ハ一年ヲ以テ法ヲ立テ毎年改正スルモノトス明治十六年度ハ募金ノ方ヲ分テ四項トス第一ハ縣社以下各社課出金（此金額未詳）第二ハ二國幣社神官義金第三ハ縣社以下神官義金此第二第三兩項合計金二百八十六圓トス第四ハ有志者義金此金千百三十六圓ト

リ右第二項以下總計千四百二十二圓ニシテ内三百圓ヲ本所へ寄納シ本所ヨリ下附金ナシ

栃木縣

明治十六年四月十四日申出
同 同 三十日認可

本縣ハ五年ヲ以テ法ヲ立ツルモノニシテ明治十六年ヨリ向五年間官國兩幣社及縣社以下三十五社並ニ該社祠官掌二百六十七名ヨリ年々二千百十四圓五十錢ヲ課出スルモノトス右官國幣社及縣社以下各社ノ出金額ハ各其社入金ノ多寡ニヨリ其數ヲ定ム其尤多キ者ハ六百圓尤少キ者ハ貳圓トス又祠官掌ノ出金額ハ社額ニヨリ五分ニ分ツ先ツ縣社祠官ヲ三圓トシ以下降級五十錢ヲ以テシ村社祠掌壹圓ニ至ル右總金額ノ内ヨリ十年間年々五百圓ヲ本所ニ寄納シ殘額千六百十四圓五十錢ニ本所ヨリノ下附金二百圓ヲ合セ千八百十四圓五十錢ヲ分所ノ費用トス列ニ有志者ヨリ一万八千圓ヲ募リ之ヲ分所ノ資本金トシ利倍増殖ノ方ヲ立テ五年ノ後ハ本所ノ寄納金

分所ノ費用等都テ此ノ利子ヲ以テ之ニ充テントス故ニ本年九月ヨリ滿五年ニ至ラハ前ノ官國兩幣社縣鄉村社及祠官掌等ヨリ醸出スル所ノ方法ハ都テ解約スルモノトス

埼玉縣

明治十六年四月三十日申出
五月九日認可

本縣八十年ヲ以テ法ヲ立ツ縣社以下各社及神官並教導職ヨリ六千圓ヲ募集シ悉皆之ヲ本所へ寄納シ本所ヨリ二千四百圓ヲ下附シテ分所ノ經費トス猶列ニ有志者ヨリ募集金ノ見込アレハ其方法未タ確定セス

福島縣

明治十六年五月十二日申出
同十八日認可

本縣八三年ヲ以テ法ヲ立テ集金ノ方ヲ分チテ六種トス第一ハ全管戸數十五万戸ヨリ一戸ニ付十錢ツ、ヲ賦課ス此金壹万五千圓トス第二ハ二國幣社々入金ノ内ヨリ金千圓ヲ出サシム第三ハ縣社以下千二百二十二社ヨリ一社ニ付金壹圓ツ、ヲ出サシム此金千二百廿

二圓トス第四ハ祠官五十名ヨリ一名ニ付平均金十圓ツ、ヲ収メシム此金五百圓トス第五ハ祠掌三百五十名ヨリ一名ニ付金五圓ツ、ヲ収メシム此金千七百五十圓トス第六ハ教導職六十名ヨリ一名ニ付金壹圓ツ、ヲ出サシム此金六十圓トス右各種金總計壹万九千五百三十二圓ハ何レモ三年賦納ニシテ内金五千圓ヲ十年賦ニテ本所へ寄納シ其殘額ニ本所ヨリノ下附金二千圓ヲ加へ一万六千五百三十二圓ノ内分所創立費一千百圓ヲ控除シ一万五千四百三十二圓ヲ資本積金トシ此金年一割利千五百四十三圓貳十錢ヲ分所ノ年々經費金高トス

滋賀縣

明治十六年五月二十日申出
同二十六日認可

本縣八五年ヲ以テ法ヲ立ツルモノニシテ縣社以下各神社及氏子ヨリ醸出ス氏子ハ全戸數十二万戸ニシテ一戸ニ付十二錢五厘ヲ収メシム此金壹万五千圓トス神社ハ分テ九等トス其別縣社ハ一等ニシ

テ一級毎年金六圓ヲ収メシム郷社ハ四等ニシテ一等五圓二等四圓三等三圓五十錢四等三圓村社モ四等ニシテ一等二圓二等一圓五十錢三等一圓四等半圓トス而シテ別ニ各神官ヨリ應分ノ出金ヲ爲サシメ分所建築費ニ充ツ（此金額未詳）本所へ寄納金ハ募金高ヲ折半シテ其半額ヲ納メ其高二就キ十分ノ四ヲ本所ヨリ下附スルモノトス
本縣ノ方法ハ進テ
改正ノ見込ナリ

京都府

明治十六年六月十八日申出
同 二十二日認可

本府八十年ヲ以テ法ヲ立テ官社府郷村社ヨリ五千五百圓ヲ募リ悉皆之ヲ本所へ寄納シ本所ヨリ二千二百圓ヲ下附シ分所費トス

新潟縣

明治十六年六月廿四日申出
同 七月三日認可

本縣八五年ヲ以テ法ヲ立テ募金ノ方ヲ三種ニ分ツ第一義務金はハ縣社以下各社神官二百三十名ヨリ一名ニ付五十圓ツ、ヲ購出セシム此金合計一万千五百圓ナリトス第二特別金はハ國幣社ヨリ五百

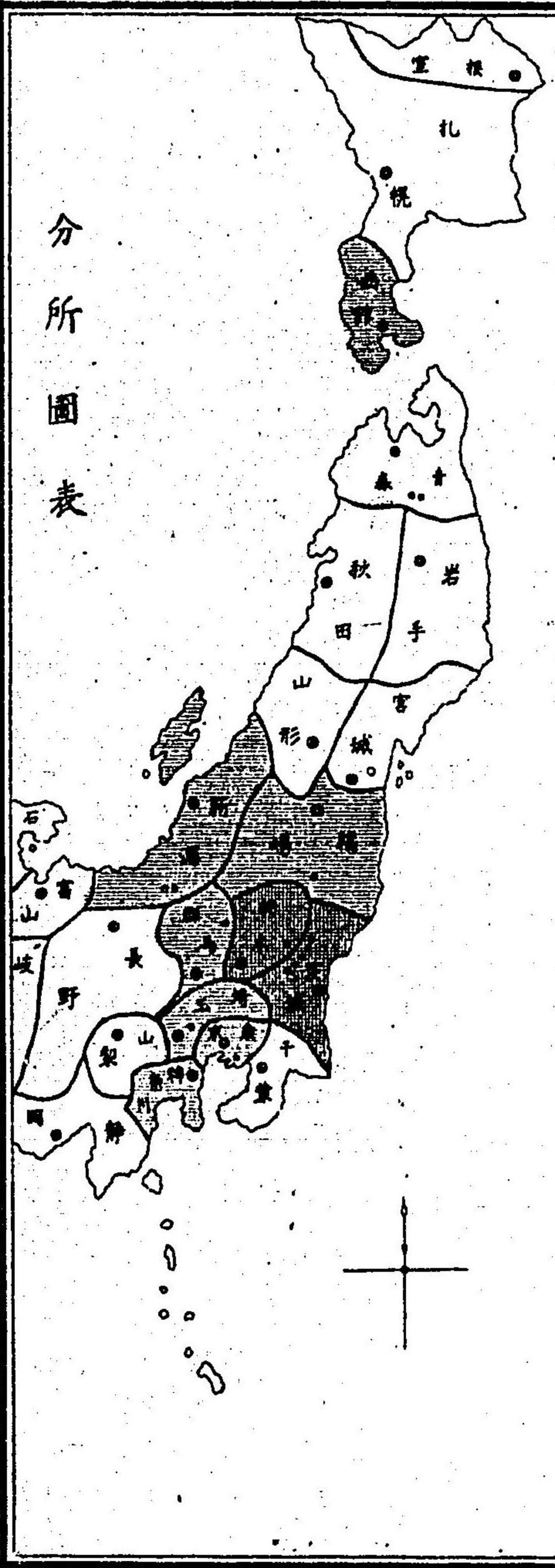
圓ヲ出サシム第三ハ有志金ニシテ全縣下有志者ヨリ二千〇五十圓ヲ募集ス右各種金總計一万四千〇五十圓ナリ内五千圓ヲ本所へ寄納シ其殘額ニ本所ヨリノ下附金二千圓ヲ加へ一万一千〇五十圓ノ内分所ノ經費金千〇三十五圓ヲ控除シ一万〇〇十五圓ヲ維持資本金トス

札幌縣

明治十六年七月二十日申出
同 八月四日認可

本縣ハ一年ヲ以テ法ヲ立テ現任神官十九名ヨリ四十七圓五十錢ヲ課出シ當分々所費トス本所へ寄納ナク又本所ヨリ下附金ナシ
以上各縣方法ニ粗密アリ申報ニ詳略アルヲ以テ其實施ノ現況ハ獨リ此文面ノミニヨリテ見カタシ故ニ法粗ニシテ事功ノ快速ナルモアリ法密ニシテ事功ノ遅緩ナルモアリ各相同シカラス又地方ニヨリ法ハ未定ナレトモ有志者奮起シテ各自隨意ニ本所ヲ翼賛シ巨額ノ寄納金ヲナシ却テ法既ニ定テ事未タ舉ラサル者ニ勝レル者アリ故ニ上ニ記

載セル方法ト下ニ附載スル圖表並ニ幾金寄納表ニヨリ之ヲ參看比較
 セハ稍各分所殿最ノ實況ヲ見ルヲ得ヘシ
 北海道諸縣ノ如キハ地形人情氣候風俗等他府縣ト大ニ其趣ヲ異ニス
 ルヲ以テ當分ノ他縣成規ノ外ニ置キ每事特例ヲ以テ認可セル者多
 シ今此維持方法ニ至テモ亦然リ



各府縣分所及有志者ヨリ當所へ寄納金申出及其既納ノ統計左表ノ如
シ表中各段最下〇點ハ厘位ナリ

義 財 寄 納 表

分所位置	金種	寄納金總高	年賦納金高	一時納金高	寄納入金高
京	都	一、一九三九、〇〇〇	一、〇九七八、〇〇〇	九六一〇、〇〇〇	一、六六〇、二五〇
大	阪	五、五〇〇、〇〇〇	五、五〇〇、〇〇〇		一、六五、〇〇〇
神	奈	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	二一〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇
兵	庫	二一〇、〇〇〇		二一〇、〇〇〇	二一〇、〇〇〇
長	崎	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇
新	潟	一、一七、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	一一、七、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇
函	館	六、〇〇〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇
群	馬	五、〇〇一、五〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇
千	葉	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇		
茨	城	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇		
三	水	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇		
愛	知	六〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇
靜	岡	二一、〇〇〇		二一、〇〇〇	二一、〇〇〇
山	梨	七、五〇〇、〇〇〇	七、五〇〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇

分所位置	金種	寄納金總高	年賦納金高	一時納金高	寄納入金高
岐	野	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	一、六〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇
長	野	一、六〇、〇〇〇		一、六〇、〇〇〇	一、六〇、〇〇〇
福	島	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇		
宮	城	一、六〇、〇〇〇		一、六〇、〇〇〇	一、六〇、〇〇〇
岩	手				
青	森				
秋	田				
山	形	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇		一〇、〇〇〇
石	川	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇		一〇、〇〇〇
雷	山				
福	井	五、〇〇〇	五、〇〇〇		
島	根				
島	取	三、〇〇〇		三、〇〇〇	三、〇〇〇
廣	島				
山	口	二、五〇〇、〇〇〇	一、五〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、五〇、〇〇〇
和	山	五、〇一〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
德	島				
高	知	三、三、〇〇〇	三、〇〇、〇〇〇	三、三、〇〇〇	三、三、〇〇〇
愛	媛				
福	岡	三、〇〇〇	三、〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
大	分				
佐	賀				
除	本				
官	本	一、三、〇〇〇		一、三、〇〇〇	一、三、〇〇〇
鹿	島				

禮	概	
振	室	
神	總	七、三七五八、一〇〇
通	計	七、一七〇八、〇〇〇
		二〇、五〇、一〇〇
		二、八四三、七五〇

神官試験

明治十五年八月三十日内務省乙第四十六號ヲ以テ府縣社以下神官撰
 舉ノ節ハ皇典講究所ノ卒業証書若クハ同本分所試験済ノ証書所持ノ
 者ニ限り認可スヘキ旨ヲ府縣へ達セラレ本所へ右試験ノ事ヲ舉ケテ
 委任セラレタルヲ以テ五條ノ試験取扱方伺及試験規則假試験條例等
 ヲ制定シ内務卿へ經伺ノ上之ヲ各府縣分所へ頒布シ各地方ニテ各其
 管内限リ神官被撰者試験ヲ施行セリ
 同十六年六月十二日内務省番外ヲ以テ府縣社以下神官従来奉任ノ者
 ト雖モ新被撰者同様ノ筋ニ付明治十七年十二月迄ニ夫々試験相受ク
 ヘキ旨諭達可致ト府縣へ示達セラレタルニヨリ是亦本分所ニ於テ擔

任スル所ナレ其試験期限ノ第三年ニ及ヘルヲ以テ本年中ニハ未タ
 此試験ニ着手セス然レ其明治十六年十月以後漸次施行ノ筈ナリ神官
 被撰者試験済ノ者へ假學証ヲ授與シタル種類及其員數ハ左表ノ如シ

假學証授與統計表

分省種類	一等假學証		二等假學証		三等假學証		合計
	新撰者	被撰者	新撰者	被撰者	新撰者	被撰者	
東京		三	三	一	四	一	九
京都			二	二	三	二	八
大阪			二	三	四	二	五
神奈川			一		一		二
兵庫							
長崎							
新潟							
函館							
埼玉							
群馬							
千葉							
茨城							
栃木							
三重							
合計		三	一	三	三	四	十六

正誤

一丁裏五行定時賦課同十行定賦課ハ共ニ定期賦課ノ類、六丁裏十行助敷ノ下ニ
日下郵成滋同ノ六字ヲ脱ス、十三丁表勤怠表標題第二期ハ第一期、十八丁表八行社
額ハ社格ノ類、分所圖表ノ中千葉縣ニ黒〇三ヲ脱シ、高取愛媛鹿兒島ノ三縣ニ同各
ニ東京官城福岡ノ三府縣ニ同各一ヲ脱ス、假令證授典統計表總計第五欄百六十六
八百六十五、同第六欄廿二ハ廿三ノ類、出納表十五年度支出高第一欄中科目ニ入り
タル諸雜費ハ小科目ニ入ルベキ類、廿八丁表別表ハ左表ノ類ナリ

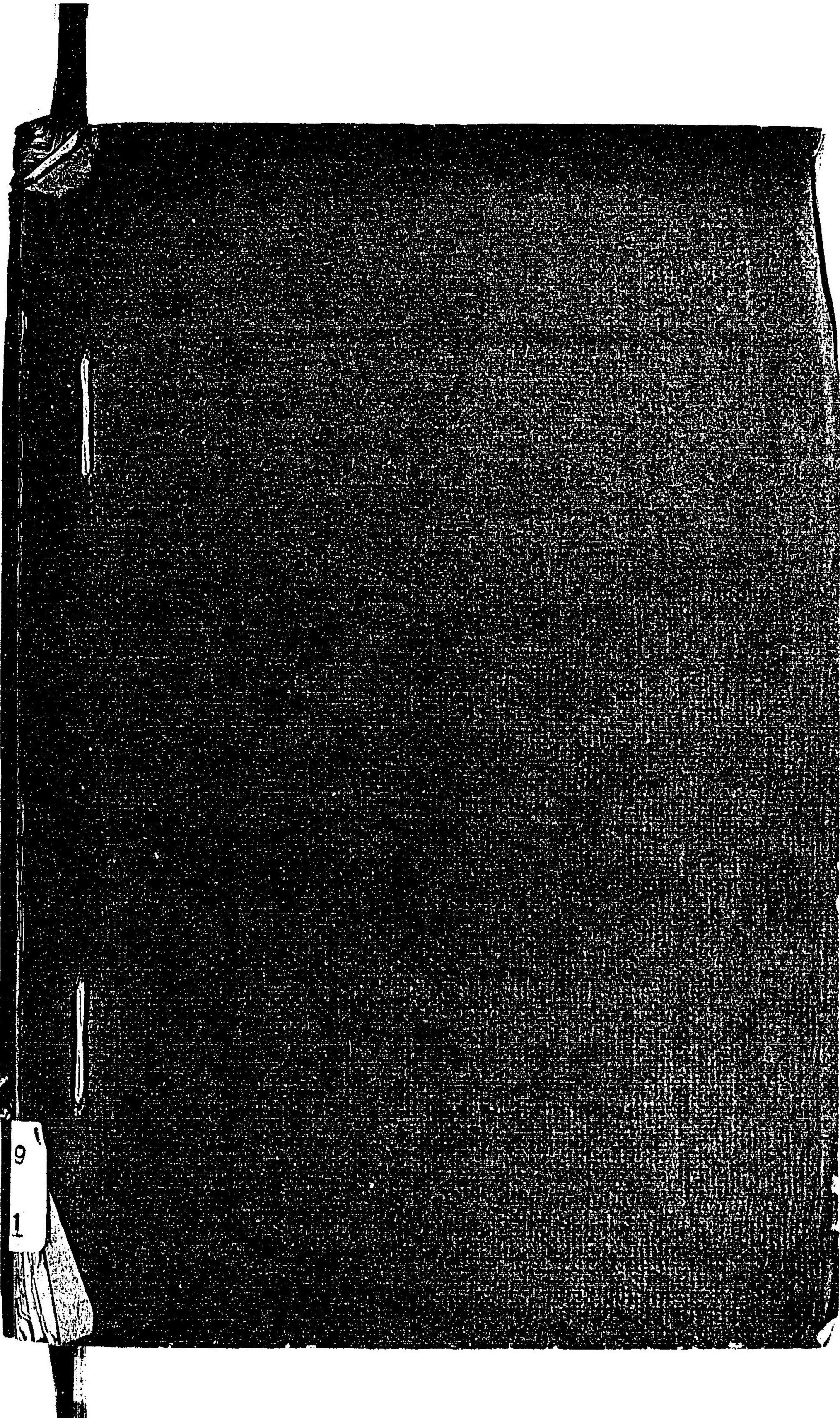
明治十七年五月六日 御届
全 年全月十六日 出版

編纂 東京麹町區飯田町五丁目八番地
皇典講究所

編纂員 松野勇雄
藤田郁之助

出版人

東京府平民
柳瀬喜兵衛
日本橋區橋町
四丁目十八番地



9

1



013993-000-2

特29-141

皇典講究所 第1年報

松野 勇雄/編

M17

ABB-0245

